

イギリス 災害をばねに復興を！

カーライル市

ロンドン事務所所長補佐 藤野 健（東京都派遣）

今回で紹介するカーライル・シティ・カウンスルは、イギリス・ブリテン島の中ほどに位置する自治体です。古くから交通の要衝として栄えたこのまちの名を近年一躍有名にしたのは、2005年1月の洪水でした。それから2年が過ぎ、カーライルではその災禍をばねにした復興計画が進められています。



カーライル市の概要

カーライル市は、イギリス・ブリテン島の中程、イングランドの中では最北部に位置しています。市境の北にはすぐスコットランドがあり、古くからボーダーシティと呼ばれていました。また、日本でもピーターラビットのふるさととして名高い湖水地方に程近く、観光の拠点として多くの旅行者がその足をとめます。

まちの起源は西暦七〇年代、ローマ人が木造のとりでを築いたころまで遡ります。以来この地は軍事上の拠点として、ある時



↑緑の芝生が美しいカーライル城

はイングランド最北端のまちとなり、またある時はスコットランド最南端のまちとなりながら、発展を遂げました。

一九七四年に、郊外の田園地区を合併する形で現在の姿となったカーライル市の面積は、およそ一〇四〇km²。これはイングランドの市としては最大の面積ですが、その人口約一〇万人のほとんどは市街に集中しています。

中世以降は交通の要衝としても発展を遂げたこのまちの産業は多岐に及びます。一九世紀から盛んな繊維業、土木業、食品製造業を基礎に、現在も市街周辺部に軽工業を中心とするさまざまな工業団地や商業団地が存在しています。

洪水、そして復興

イギリスで「カーライル市」と聞いて多くの人が思い浮かべるのが「洪水」というほど、二〇〇五年一月に全英を駆け巡ったその災害の映像は衝撃的なものでした。

その被害は、土曜日の昼間という災害発生時間のおかげで死者こそ三人に止まったものの、浸水家屋一九二五戸、停電四万世帯にも上る未曾有の大災害でした。本来災害対策で中心的な役割を果たすはずである市庁舎、消防署、警察署等がすべて浸水してしまったため、その初期復旧活動は混乱を極めました。

しかし、その後の復旧活動は迅速でした。

水が引いた後、二・四人の市職員が延べ六〇〇〇時間近くもかけ街路の清掃を行い、災害発生後数週間、二・八〇〇tもの損傷家財と五〇〇〇tもの故障家電の回収等を行ったのです。

災害の急性期は過ぎて、さらに被災者に対する福祉援助、住宅対策、企業援助、インフラ復旧、財政支援、メディア対策等、課題は山積していました。カーライル市では、これらの作業を、警察、消防、他官公庁、民間企業、各種ボランティア団体等、各種セクターと一体となって対策を考えるワーキンググループを組織することによ

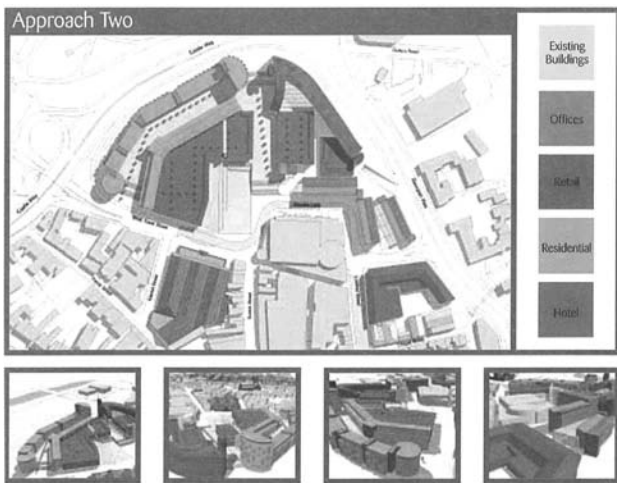


↑水没した市庁舎（カーライル市提供）

り、文字通り市民が丸となって乗り切ったのです。

災害の教訓として、日常の防災訓練の重要性、住民への情報提供のあり方、帰宅困難者対策、災害対策基金の必要性等についての問題点が挙げられ、それぞれ市当局のその後の施策に反映されています。

さらに市では、今回の災害を市街中心部の再開発を行う好機と捉え、「カーライル・ルネッサンス」という計画書を発表しました。この計画書は単に災害に強いまちを作るという復興計画ではなく、「ルネッサンス」というその名が示すとおり、まちの一〇年後以降を見据えた、経済的・工学的・社会的な都市再生計画だとされています。



↑「カーライル・ルネッサンス」中の再開発（カーライル市提供）

計画書の中では、まちがそれまで直面していたさまざまな都市構造上の課題、例えば、脆弱な交通ネットワーク、商業・工業地域の整備水準、居住地域の環境等を改善すべく、市街をいくつかの地域に分け、そのそれぞれについて複数の具体的再生案が提示されています。

現在、市ではこの計画について市民からのパブリックコメントを募っています。計画が完成したことで、復興の理念は提示されました。後はこの計画が絵に描いた餅とならないよう、いかに実行に移すかにその課題の軸が移ってきました。災害をばねにしたカーライル市の復興への挑戦は、これからが真の正念場を迎えます。

その他の施策

洪水ばかりがクローズアップされがちなカーライル市ですが、ほかにもさまざまな施策に力を入れています。その一つが観光施策です。湖水地方観光への基点でもあり、世界遺産にも指定されているハドリアヌスの長城へも程近いカーライル市では、観光を重要な基幹産業として位置付け、ホームページをはじめとする各種媒体で、歴史を前面に出した積極的なPRを行っています。

そんなカーライル市の悩みは、湖水地方などのイギリスの代表的な観光地と比べると、まだまだ観光の「中心」ではなく、あくまで「基点」に過ぎないということ。多く



↑ハドリアヌスの長城（カーライル市提供）



↑美しい郊外の風景（カーライル市提供）

の観光客が足を止めてくれますが、そのほとんどは滞在期間が短く、すぐにまちを離れていつてしまいます。そのため、市ではさまざまな歴史的観光資源を有効に利用してイベントを開催したり、アウトドア型の

レジャーを提案したりして観光地としての魅力を高めようと腐心しています。

また、観光客だけではなく、コンベンション・シティとしてビジネス客の誘致にも力を入れています。その中心となるのが、「カーライル・カンファレンス・グループ」という官民協働の組織です。この組織は、カーライル市が中心となり、市内の観光関連企業により構成されています。独自のホームページを持ち、各種イベント会場や宿泊施設等に関する情報を一元化して提供するほか、ホームページ上から各種の予約を受け付けることができるようになっていきます。さらに、一般企業の協賛を受けて、各種印刷媒体によるPRも行っています。情報の集約だけではなく、年間を通じて召集される理事会や分科会では、カーライルの観光産業のあり方などさまざまなテーマについて活発な話し合いがもたれ、そこで話し合われた内容は市の観光施策に直にフィードバックされるといわれています。

観光施策以外にも、周辺自治体に先駆けてプラステックとダンボールのリサイクルを始めた廃棄物施策、各種フェアの開催による商店街活性化施策等、カーライル市が力を入れている施策は枚挙に暇がありません。

おわりに

災害から二年近くがたった今、われわれ



↑市街地中心で行われたフードフェア（カーライル市提供）

がカーライル市を訪れても一見ではその被害の痕跡を間近に見ることはできません。しかし、市職員の説明を受け、注意深く見ると、その爪痕が随所に残っていることに気が付きます。市民にとっては、洪水はまだ完全に過去のものではないのです。しかし、一度は災害に打ちひしがれたカーライル市ですが、その災害をばねにして、よりよいまちに生まれ変わるため不断の努力を続けています。昨年九月には市内に新しい大学も開校し、ますます活気を増すカーライル市。これからの発展が楽しみです。